

植生の移り変わり

植物群落は、周りの環境によって変化しています。例えば、山崩れや埋立てでむきだしになったところを長い年月に渡って放りっぱなしにしておくと、いつのまにか緑色をしたものが生育するようになるでしょう。そして、メヒシバ、ヒメジョオンなどの一年草を主とした草地となり、やがてススキ草地のように多年生草原に変わります。

しばらくすると、ノリウツギやアカメガシワなどの樹木が混ざってきて、だんだんとコナラ林やアカマツ林のような陽樹林(二次林)となり、最後のカシ類、シイ類、ブナなどが生い茂る陰樹林となっていくます。この最後の最も安定した状態を極盛相とよび、こうした森林をこれ以上いくら放っておいても変化は起きません。また、このような過程は、植物自身の落ち葉、落ち枝を腐食させ、長い年月の間に土壌の栄養価を高めながら進行していきます。このような植物の移り変わりを「植生推移」(または遷移)といいます。

湿原は、水分の影響を直接的に受けた栄養分の少ない特別な環境にあるので、ススキやノリウツギなどの樹木は育ちません。それで、いつまでも湿原の状態が続くのです。それが乾燥するとススキ草原やノリウツギなどの植物が侵入し始めます。このような状態が続くと湿原はなくなってしまいます。

植生の移り変わりはいつも極盛相に向かって進行するとは限りません。ススキ草原で野焼きや草刈りが行われると、草原の状態が続いていきます。また、森林の伐採が行われたり、山火事が起きて植物の生育環境が荒れたりすると推移は逆戻りしたりします。

小田の池の貴重な湿原の植生を現状のまま維持していくためには、貧栄養の湿原の状態を保っていき植生の推移を押さえることが必要となります。



【沼沢地・湿原】



池の周辺部で水深の浅い沼沢地にはフトイ、クログワイ、カンガレイが群落をつくっています。また、厚い泥炭層の堆積した所には、ヌマガヤ、ヤスマクロボスゲ、ヨシ、ミズオトギリやミズゴケ類などが生育し湿原特有の景観をつくっています。

湿原の東側を取り囲むようにスギ・ヒノキの植林が行われています。植林されたところは湿原の水源部分にあたり、水源涵養林として湿原の水を保っています。伐採は一度に全部を伐らないようにすることが必要です。植林地は下草刈りや枝打ちなどが行われ、適当に日光が入るので林内にはつる植物やもとにあった稚樹が生えています。



〔植林(スギ・ヒノキ林)〕

〔森林(コナラ林)〕



〔二次林(ノリウツギ林)〕

野焼きや採草をやめた小田の池の西斜面では、ノリウツギ、アカメガシワ、アキグミ、カラスザンショウ、ヌルデなどがスイカズラ、ミツバアケビなどのつる植物とともにやぶ状の林をつくっています。

小田の池の周辺地には、高木のアカマツが生育し、コナラやエゴノキが茂る林があります。ブナ林やミズナラ林はなく、この林が最も推移の進行した林です。林内にはウリハダカエデ、ヤマウルシ、コバノガマズミなどの落葉樹が生育しています。

〔草原(ススキ草原)〕



池の北側台地に広がるススキ草原には、トダシバ、ヤマハギの他、アキノキリンソウ、リンドウ、ワレモコウ、ウメバチソウが生育する。また、キスミレ、ホクチアザミなど大陸系遺存植物もみられます。